



Ⅱ . 男声合唱組曲「雪明りの路」

春を待つ	作詩 伊藤 整
梅ちゃん	作曲 多田 武彦
月夜を歩く	指揮 近藤 文詞
白い障子	
夜まわり	
雪 夜	

## Ⅱ . 男声合唱組曲「雪明りの路」

### 「基本を守った名演奏を」

多田 武彦

旧制大阪高等学校に入学直後、一年上の田中信昭さん（現、東京混声合唱団常任指揮者）らに誘われて男声合唱団に入った私は、数年後、関西学院グリークラブの名演奏のとりこになった。その頃の私の耳が肥えていなかったのか、または今の私の耳が肥えているせいなのか、よくわからないが、その頃の関学グリーは、合唱演奏に関する基本を実に忠実に守っていたと思う。そしてこれが今に至るまで持ち続けられていると同時に、当時には無かった良さも、その後の関係者の努力で育まれている。

ところが、今の日本の合唱演奏の大部分は「騒音コーラス」とでもいおうか、余りにも基本が無視されていて、なかなか落ちついて演奏会をきいていられない。ともすれば、実力合唱団のいくつかも、この傾向に流されてしまっている。忘れられている基本とは何か。

1. 各パートのピッチが合わない。(当時関学が黒人霊歌のGreat Dayを演奏すると、冒頭のDayの低いF音で、ベースの20数名は見事にピッチの合ったF音を出した。)
2. ハーモニーしない。(当時はきちんとハモって、おもに外声がきこえてくる、トップテナーが主に奏でるメロディーに、ピッチの合ったベースがからむ。セカンドとバリトンが、きちんと内装を構築する。)
3. ピアノ伴奏が、コーラスと異った音楽を奏でる。(ジェラルド・ムーアが、フィッシャー・ディスカウに寄り添うように冬の旅の伴奏をするように、当時は、合唱部分の持つ力学に寄り添うようなピアノ伴奏であった。)
4. 楽譜に書いていない「フレーズング」や「音の開始時と終止時の変化」や「子音による変化」への関心がない。(当時は、これが徹底されていたため、詩の意味が、よくわかった。最近のようなKwaとか、Khiとか言った奇声はなかった。)

まだまだ書き出したら足りない。現在の関学グリーやその他一部の基本を守る合唱団が、また少しづつ多くなってほしいなあ、と切望するこのごろである。

当時、関学グリーの演奏に少かったのは、「バラード」であった。昭和33年、私をはじめ関学グリーに委嘱されて書いた「中勘助の詩から」の終曲「追羽根」で、関学グリーは、この「バラード」を見事に仕上げた。この努力が翌年私に「雪明りの路」を書かせた。

伊藤整先生が、後年関学グリーへの書簡でおっしゃっていたように、自由詩主体の詩群が中心のこの組曲を、引続いて関学グリーは名演奏をした。

しかし、このときも、前述した基本が守られていたからこそ、ポイントポイントでのハーモニーは、不協和音も正確に鳴り、「梅ちゃん」での持続低音は、ウィーンフィルのチェロのように聴いた。詩そのものの音楽に寄り添うように作曲した「月夜を歩く」では基本を忠実に駆使しながら、詩人の心を表現してくれていた。

関学グリーは、毎年、こうした「基本を守った名演奏」をきかせてくれる。だから安心して聴ける。しかし安心出来ない。「騒音コーラス」の巷から逃れてくる本当の合唱マニアたちが、息をひそめて諸君の演奏をききにくるのだから。



多田 武彦